

『東坡題跋』卷四に於ける二王の存在に関する考察（中）

塚本 宏

はじめに

『東坡題跋』は、六巻からなっていて、巻一は文、巻二、巻三は詩、巻四は書、巻五は画および墨紙筆硯、巻六は琴事、琴曲、古器物、遊覧と編集されている。蘇軾（一〇三六―一一〇一）が書いた題跋を後世の人が集録したもので、内容的には幅が広く、蘇軾の多才ぶりが発揮されていることがわかる。

本稿は巻四のみをその範囲とし、しかも、巻四で表題のあるものは一二二題あるが、そのうちから王羲之、王獻之の父子、即ち二王に関する内容のものが二十六題ある。この二十六題のうち、前稿は上編と称し、前から三題を対象として考察を試みた。即ち、

1 書摹本蘭亭後（摹本の蘭亭の後に書す）

2 題蘭亭記（蘭亭記に題す）
3 題逸少帖（逸少帖に題す）
である。本稿については、これ以後の題跋について考えていくつもりである。なお、行頭の番号は巻四全体、一二二題の通し番号である。

- 4 題遺教經（遺教經に題す）
- 6 題二王書（二王の書に題す）
- 7 題晋人帖（晋人の帖に題す）
- 8 題蕭子雲帖（蕭子雲帖に題す）
- 9 跋褚薛臨帖（褚・薛の臨帖に跋す）
- 10 辨法帖（法帖を辨す）
- 12 疑二王書（二王の書を疑う）
- 13 題逸少書（逸少の書に題す）

- 14 又(又)
- 15 又(又)
- 16 題子敬書(子敬の書に題す)
- 22 跋庾征西帖(庾征西の帖に跋す)
- 26 書逸少竹葉帖(逸少の竹葉帖に書す)
- 29 跋葉致遠所藏永禪師千文(葉致遠所藏の永禪師千文に跋す)
- 31 題顔公書畫讚(顔公の書せる画讚に題す)
- 36 書張長史草書(張長史の草書に書す)
- 39 跋胡霈然書匣後(胡霈然の書匣の後に跋す)
- 42 書所作字後(作る所の字の後に書す)
- 68 評楊氏所藏歐蔡書(楊氏所藏の欧蔡の書を評す)
- 111 跋山谷草書(山谷の草書に跋す)
- 112 跋希白書(希白の書に跋す)
- 116 論沈遼米芾書(沈遼・米芾の書を論ず)
- 120 書唐氏六家書後(唐氏六家の書の後に書す)

一

「題遺教經」は、東坡が歐陽文忠公、即ち歐陽脩(一〇〇七〜一〇七二)に会って話したときのことを引用している所から始まる。即ち、「遺教經は王羲之の筆蹟ではない」と脩が断言

している。東坡はこの脩の自信に満ちた言を念頭において遺教經を観察して、やはり脩の言葉通りで、「信若不忘」(まことにいつわらざるが若し)と述べている。しかし、その後さらに、羲之が生存していた時からすでに本物そっくりの筆蹟が往来し、自分自身でさえ識別できなかったのである。ましてや数百年たった今日、伝刻されたものを見て、本物かどうかを決めるということは困難であると付け加えている。従って、遺教經が羲之の筆蹟でないと言われるのも最もなことであり、また事実ありそうなこともある。しかし、最後に遺教經のことについて触れ、「顧筆畫精穩、自可爲師法。」とある。即ち、遺教經の筆画は精穩であり、手本にできる書であるという意味である。これは遺教經の真偽に関係なく、東坡の遺教經の書に対する評であり見識である。精穩、即ち精緻にしておだやかという評は、規範にする書に当てられる言葉である。

しかし、この最後の部分の「顧筆畫精穩、自可爲師法。」を、そのまま順接的に前述のようにとらえないで、「顧」の語感を考えて「(真偽よりも)その遺教經の筆画が精穩⁽¹⁾であれば手本にすることができると思う。」という解釈がある。この場合は東坡自身が遺教經を目前に於いてこの跋を書いていることになってしまふ。東坡が実際に見て書いたのであれば、「筆画が精穩であれば手本にすることができると思う。」とは記せない。従って

「願」の意味する所が重要になるが、「願」の意味に、(A)「すなわち」「ただ」に対して、(B)「おもうに」「考えてみると」(A)(B)の両者があるが、(A)の意に解せば、東坡は実際に遺教経を目前に見て跋を書いたことになり、(B)であれば仮定法のように解されて、東坡は実際に自分の目で見ないでこの跋を書いたことになる。

遺教経は、「⁽²⁾仏垂般涅槃略説教誡経」一巻のことで、『大正新修大藏経』巻一二に収められている。仏陀入滅の時の遺誡を載せた涅槃部の經典である。羲之が書いた遺教経は、『墨池堂帖』と『玉煙堂帖』に刻されている。『墨池堂帖』は五巻からなり、第一巻の黄庭経の次にある。『玉煙堂帖』は二十四巻あり、第三巻の東方朔画賛の次に位置していて、巻首の董其昌の序文に次のようなことが述べられている。

わが友陳元瑞は博雅好古で、書学に深く各体ともに工である。なかんづく楷法を最もよくし、鍾繇・趙子昂も三舎をさけるほどである。ことに鑒裁に於て特に精で歴代の名跡と石刻の佳なるものとを網羅し、黄長睿の東觀餘論や、米芾の書史などの説を或は離し、或は合せ、これを自ら折衷してこの法帖を纏めあげたもので、彼の耳食の徒の為すところはとほるかに趣を異にせるものである。この帖が一たび出たならば、世の臨池家はこれによってそのすべてを会萃することができ

るであろう。

と言っている。また、遺教経については歐陽修の『集古録』に、遺教経は相伝えて羲之の書といえるも偽也。蓋し唐の世の写経手の書するところならん。唐時の仏書の今在るものは、大抵書体皆これに類たり。第その精粗同じからざるのみ。近ごろ唐人書するところの経を得たるものあり。その一に題して薛稷と云い、一は僧行敦書と云えるも、皆、二人が他に書するところと類せず。而もこれと頗る同じ。即ち写経手の書するところなるを知る。然れどもその字また愛すべきが故にこれを録す。蓋し今の士大夫、筆画の能くこれに髣髴たるは鮮し。

と、遺教経には批判的である。唐代の写経は皆この手のもので味気のあるものではないが、どこか愛すべき所があるので録されているのである。また、黄山谷は、

仏遺経一卷、何人の書なるかを知らず。或は曰う、右軍羲之の書なりと。吾嘗つてこの書を評していう、楷法中にありて小しく楽毅論に及ばざるのみ。清勁方重なるは蕭子雲等を度越す。

と述べ、何人が書いたものかは不明であり断定を避けている。しかし、その書の秀れている所は称している。「小しく楽毅論に及ばざるのみ」は細楷としては見るべきものであると解せる。

また、『廣川書跋』は、唐人の書としてその筆者まであげている。即ち、

今世知らず衆毅論は已に火に遭い、而して別本は薛崇徹の蔵するところたりしが五溪に亡せしを。その搨本は皆摹画なれど、善き者はまた写經手と何ぞ異ならん。但、この書は疏肥を密ならしめ、密瘦を疏ならしめ、自ら古人の書意を得たり。その名輩に推さるることは良にゆえあるなり。昔、張翼、羲之に代りて奏を草し幾んど真を乱ると、褚遂良の右軍を臨写するやまた高妙たり。但、恨むらくは自然に乏しきを。後人逸少の蹟を見ず。碑刻伝うるところの若きは已に佞偽多し。則ち臨揚善工、自ら世を惑すに足る。嘗つて仏戒經を得たり。その碑は乃ち比丘道秀の書にしてこの經と一体たり。道秀は徳宗のときの人。その書は建中三年壬戌(七八二年)に当れり。蓋し欧陽脩、黄山谷、碑陰を見ざりしが故に、評するところ此の如きのみ。

とある。この跋文中にある「張翼代羲之草奏、幾乎乱真」は梁の虞穌の『論書表』にある

羲之常自書表與穆帝。帝使張翼寫効、一毫不異。題後答之。羲之初不覺。更詳看乃歎曰、小人幾欲亂真。

を引用したのであろう。

また、本跋文中(「題遺教經」)の「然自逸少在時、小兒亂真、

自不解辨。」も、この虞穌の『論書表』の「羲之初不覺。更詳看乃歎曰、小人幾欲亂真。」を考えに入れての論である。さらに、王僧虔の『論書』にも同じことが見られ、

張翼書、右軍自書表。晉穆帝令翼寫、題後答右軍。右軍當時不別。久方覺云、小子幾欲亂真。

とある。張翼は羲之の書に酷似したものを書くことが得意であつたのか、それを見込んだ穆帝も少々人が悪い。羲之をからかつた感じがなきにしもあらずである。しかし、模写させた作品が寸分も違わずに見えたという穆帝の目も実は問題があり、困つたものである。そして、敢えて模写させた上表文の後に題して羲之に答えたのである。これは明らかに羲之を試したのであろう。羲之の目がどの程度本物なのかを、きつと知りたかつたのであろう。しかし、穆帝がこのような考えを起したのも、張翼があまりにも羲之の書に似た字を書いたからである。この場合、もしも羲之がこの試みに乗せられて気がつかなかつたらどうなつていたことであろうか。確かに羲之は初めは気がつかなかつたのである。即ち「羲之初不覺」であつたが、羲之は時間をかけてじっくりと見れば、その本質の違いに気がついたのである。表面的には酷似しているが、その書の本当の姿、内面的な本来の羲之自身の姿は、張翼の模写には見られないということに気がついたのである。要するに見抜いたのであるが、こ

れは当然のことである。張翼の模写は外面はそっくりに装ってよくでき上っていたが、本質はどうしようもないということであろう。外面的なものはそっくりと真似できても、目に見えない

内面的なもの、精神的なものはどうしても真似できないということであるが、実は書の最大の魅力である森厳さ、深遠なるものがそこにあるのである。人間が違えば当然そこに書かれた書は違うのである。いくら外の形を似せてもそれは単なるもぬけの殻である。張翼の模写がどんなに羲之に似ていてもそれはもぬけの殻である。それを羲之が見抜くのは当然のことである。穆帝は見抜くことができなかつたのであろう。きつと外面のみを見て形がよく似ているというアマチュア的な見方をしたのであろう。羲之はプロ的な見方をするのは当然である。アマとプロの違いがはっきりと出ているという考え方もできるであろう。表面的には酷似していたために多分羲之はうっかりはじめは見抜けなかつたかもしれないが、さらによく見ていくと、歎息しておもむろに言ったのである。「小人幾欲亂眞」(『論書表』)、あるいは「小子幾欲亂眞」(『論書』)、あるいは「小兒亂眞」(『東坡題跋』)と、即ち「つまらぬ奴が真を乱さんばかりだ。」と本物とまちがえさせられたのである。従つて遺教経の真偽について半信半疑で見ていた東坡は、羲之が生きていた時からにせものが出まわっていたこと、しかも羲之自身が見まがうほどのもの

のがあつたのであるから、ましてや数百年たった後の伝刻されたもので真偽を決めようとするのは大変難しいことであるという東坡の気持もよく理解できる。

二

「題二王書」(二王の書に題す)は、羲之、獻之、張芝、索靖を登場させて具体的な比較論でもつてはつきりと述べている。

筆成家、墨成池、不及羲之、即獻之。筆秃千管、墨磨萬鋌、不作張芝、作索靖。

とあるが、比較の対象が誰かによつて読み方が変わってくる。使い古した筆で塚をつくり、筆を洗つて池の水が真黒になるぐらゐの努力をしても、羲之には及ばず、せいぜい獻之ぐらゐであるということであるが、一体誰に対してなのか。一般的な人に対して一般論として解すのか、或は東坡自身なのかによつて全体の意味が変わってくる。筆は千本も毛がすり切れるまで使い、墨は一万鋌を使い、それを磨りつぶすほどの努力をして、も張芝には及ばず、せいぜい索靖ぐらゐであるということも、張芝と索靖のように人物を入れ替えただけで前と同じ論法である。そしてこれも対象者として特定な人物を考えるか否かで意味が変わってくる。

また、比較の実例として「羲之に及ばないが、せいぜい獻之

ぐらい」と「張芝にはなれないが、せいぜい索靖ぐらい」とあり、羲之と獻之、張芝と索靖の間にはつきりと差をつけている。つまり羲之と張芝は一流であり、獻之と索靖は二流であるということとなる。このようにはつきりと差をつけて論じ、考えるということは問題だと言えばそれまでであるが、ここはやはり古來からの書論などで論じられてきた実績、評判そして故事などに基ずいて論じられているのであるから、納得せざるを得ないであろう。しかし、羲之と獻之の二王の書に題したのであるから、東坡も思いきったことを試みたものである。後世の人への影響も考えてのことであろうし、前述のように比較の対象者が東坡自身であれば、時代は違いますが羲之と張芝と東坡を比較したり、獻之と索靖と東坡を比較したりして書作品を鑑賞するということに自ずとなる。対象者が東坡であれば、東坡自身が自分のことを羲之や張芝に及ばないが、獻之や索靖にはせいぜい及ぶであろうという見方になる。「及ぶ」ということの意味は、ほぼ同等ぐらいとも考えられるであろうが、実際には東坡を比較の対象者に考えたほうがこの跋文ははつきりと理解されるであろう。

また、故事については、「筆成家」は隋の智永が「宣和書譜」第十七に、唐の懷素は「唐国史補」巻中にある。「墨成池」は張芝が有名で羲之の「自論書」に見える。

「題晉人帖」(晋人の帖に題す)は「唐太宗購晉人書、自二王以下僅千軸」ということで、「二王」の名前が一回使われているだけであるが、唐太宗が晋人の書を買ひ求め二王より以後の人では、わずかに千軸を買っただけであつたということ。このことについては「法書要録」⁽⁴⁾巻三に

太宗於右軍之書、特留睿賞、貞觀初、下詔購求、殆尽遺逸、万機之暇、備加執玩。

とある。また、「唐会要」⁽⁵⁾巻三五にも

初購人間書、凡真行二百九十紙、装為七十卷、草二千紙、装為八十卷。

とある。

また、蘭亭は玉の箱(玉匣)に入れて太宗と一緒に昭陵に葬ってしまったので、この世の中で見る事ができなくなったが、その他のものはみな朝廷の秘府に所蔵されていた。「玉匣」に入れて昭陵に殉葬されたのであるから、盗掘などの人災に遭遇しない限り、そのまま残っていたはずである。物理的に腐食して朽ちることは考えられないこともないが、玉の箱であるから、そのままであれば数百年位は保存できたであろう。多分、中味の蘭亭序よりも玉の箱のほうに当時は価値観が高かつたのであろうか、中味を棄ててしまい玉の箱に目を付けるということは考えられることである。もしこのような盗掘がなければ、きつ

と蘭亭序の本物は現在に燦然とかがやいたであろう。

そして、本題跋によれば則天武后の時に、張易之兄弟に盗みとられて、それから世間に流出し、王涯、張延賞の家に所蔵された。その後王涯が殺された時、軍人に奪い取られたが、軍人は金と玉で作った軸の方をはぎ取って書は棄てたといわれる。

金銀財宝に目がくらみ、すべて自分のものにして自分と無関係な書は棄ててしまうなどということは許せないことである。人間のあさましさが露骨にあらわれていて、残念至極なことである。東坡は以前、李瑋の所で晋代の人の書を数帖見たが、みな「涯」の印が押されていた。それらは王涯の物であったのである。それらの中には謝尚、謝鯤、王衍などの晋代の人の帖があり、みな秀れたものであったが、中でも王衍の書は一段とすばらしく、たくさんの鶴が羽を持ちあげて飛び立とうとして、まだ飛び立っていないかのような感じであったという、いかにも詩人の東坡らしい表現が最後に見られる。即ち、

如羣鶴聳翅、欲飛而未起也

であるが、これは晋の衛恆の『四體書勢』の「古文」の項にある

蟲跂跂其若動、鳥似飛而未揚。

の「鳥似飛而未揚」と似た表現である。これは王衍の書についての素晴しさを言い表わした書評であるが、今後に大きな飛躍

の可能性を秘めているということであろう。

謝尚（三〇九〜三五八）は、字は仁祖、陽夏（河南省）の人、謝鯤の子であり、謝安のいとこである。諸芸にひろく通じていたが、特に音楽を得意とした。書は草書を善くした。『宣和書譜』に

作草書、深得昔人行筆之意

とある。先人の秀れた書家の行書を深く学び自分の草書を書くもとにしたということである。謝尚についてその人柄の一片が『世説新語』（以下『世説』と略す）の言語第二46に見られる。

謝仁祖年八歲、謝子章（父の謝鯤）將に客を送らんとす。

その時、語すでに神悟、自ずから上流に参わる。諸人咸共にこれを歎じて曰く、「年少くして一坐の顔回なり。」と。仁祖曰く、「坐に尼父無し、いづくぞ顔回を別たん」と。

とある。八歳にして謝尚は既に天才ぶりを発揮している。すでに語る言葉が神悟の境に至っていたということであるから、誰しも驚かされる。「神」の字義に「人知でははかり知ることのできない靈妙なはたらき」とか「極めて尊いことや、秀れたことを言う言葉」などの引伸義があるが、謝尚は書における活躍より以上に、あるいは書をも含めて、尊大な高德が発揮され「顔回」とまで噂されることは偉大なことである。

謝鯤（二八二〜三三三）は、字は幼輿、陽夏（河南省）の人、

謝尚の父、年少のときから名を知られ「老子」「易」を好み、音楽を善くし特に琴に巧みだった。王敦(二六六〜三三四)の長史、予章太守を勤め、清談にも秀れていた。謝安(三二〇〜三八五)が謝鯤を評して「若し七賢に遇わば、必ず自ずから臂を把りて林に入らん。」(『世説』賞誉第八九)とあるが、竹林に腕を引いて連れ込んだであろうと言われたほど清談が好きであった。「老子」や「易」を好んだということから考えても言えることである。書に關しての特別の記事は、謝鯤にはないが謝尚が登場すると必ず父子ということで謝鯤も登場するのである。謝鯤はまた自然と対面し、自然と共に生活することにも才能を發揮した。即ち自然界にとけこんで遊ぶ釣の達人でもあった。また、『世説』巧芸第二十一に

顧長康、謝鯤を画き、巖石の裏に在らしむ。人其の所以を問うに、顧曰く「謝は云う、一丘一壑自ら謂えらく、之に過ぐ、と。此の子宜しく丘壑の中に置くべし。」と。

とある。これは謝鯤自身が丘壑に生きる境地は誰よりもまさっているつもりだと言っているのであるから、顧長康(画聖と言われた顧愷之のこと)が描く画は当然丘壑の間に謝鯤を配置するのである。また、同じ内容のことが、『世説』品藻第九七にある。即ち、明帝(司馬紹)が謝鯤に

「君自ら謂えらく、庾亮に何如」と。答えて曰く、「廟堂に

瑞委し、百僚をして準則せしむるは、臣亮に如かず。一丘一壑は自ら謂えらく、之に過ぐ。」と。

と庾亮と比較されたときに自分の口から述べている。山に住み、溪流に釣糸を垂れ、自然に悠々自適するという点では、中書令の庾亮よりも自分のほうがまさっているということである。廟堂で礼服を着て、百官に模範として見習わせる点では庾亮には全く及ばないがということである。つまり、謝鯤の自然に対する精神は前述のように徹底しているのであり、書をはじめとした諸芸に通じる為にはこの精神は不可欠である。謝鯤のように大自然に生きることこそ書境を追求する重要な要件である。

王衍(二五六〜三一)は、字は夷甫、臨沂(山東省)の人、西晋の尚書令、司空、司徒を歴任。老莊の談論にふけり、清談の大家として知られたが、政治を怠つたと非難され、後に石勒に殺された。書は特に行草を善くしたと言われる。前述の東坡の文学的表現そのものである。また、王衍は色白のようであった。いつも手に持っている玉の柄の麈尾と同じ白に見えるほど上品な手をしていたと言われる。また顧愷之が画賛の中で、王衍を評して「石が清く高く切り立ち、その岸壁の高さは千仞のようである。」と述べているが、これは彼の人柄を評するに十分な言い方であると『宣和書譜』にある。さらに書に關して『宣和書譜』には

作行草尤妙。初非經意、而灑然痛快、見於筆下。亦何事雙鉤虛掌八法回腕哉。其自得於規矩之外、蓋眞是風塵物表、脫去流俗者、不可以常理規之也。今御府所藏、行書一。尊夫人帖。

とある。特別に気をめぐらして意を働かせて書かなくても、自然に驚くほど痛快なものが筆先から生まれた。昔からの双鉤法とか、虚掌実指の執筆法とか、永字八法とか、腕法の回腕法とか言われる運筆、用筆のための技術にとらわれることなく、自由に書くことこそ俗塵を超越した書が生まれ、流俗から一步抜け出た人物の爲せる技なのである。これは常理をもつてはかることのできないものであり、実に尊いものであるという絶賛の内容である。さらに、人柄については『世説』の各篇に散見できる。特に老荘について深く研究していたことは次の『世説』文学第四13でもわかる。即ち

諸葛宏、年少くして肯えて学問せず。始め王衍と談じ、便ち己に超詣す。王歎じて曰く、「卿天才卓出す。若し復た少しく研尋を加うれば、一も愧ずる所無からん。」と。諸葛宏、後に老荘を看て更に王と語るに、便ち相抗衡するに足る。

とある。諸葛宏の老荘に対する努力も認められるが、王衍の深い識見があったからこそ、宏の天賦の才がずばぬけていることを見抜いたのである。「もしまたさらに研鑽を加えれば、ひけめ

を感じるなど何ひとつない。」と、宏に対して自信をもって言っている王衍のこの言葉こそ、王衍の人柄そのものについて語り尽していると見てよいであろう。また、王戎（王衍のいとこ）の言として、『世説』賞誉第八16に

王衍は神姿高徹、瑤林瓊樹の如し。自然是れ風塵外の物なり。

とある。「瑤」も「瓊」も玉のことであり、本文を「玉林玉樹」としても同じ意味であるが、とにかく王戎は最高に誉め称えている。「風塵外」とは俗世を超越したという意であり、前述の『宣和書譜』の「風塵物表」と同義である。また同じく『世説』賞誉第八27に

弟の王澄、兄の王衍を自ず。「阿兄の形は道に似れども、神鋒太だ儻なり。」と。太尉答えて曰く、「誠に卿の落落穆穆たるに如かず。」と。

とある。弟の王澄（二五九〜三二二）が、兄さんは形は無為自然の道を体得しているように見えるが、心のほこさが鋭すぎるといふ評に対して、王衍は弟の度量の大きさ、態度のうるわしく、うやうやしきには及ばないと述べている。この場合の「落落」は、「多いさま」「度量が大きいさま」の意である。『老子』に「碌碌如玉、落落如石」とあり、また晋の『石勒載記』に「大丈夫行事、當礪礪落落」とある意に通じる。弟の王澄の一見厳

しい評に對して、兄としては少々余裕を見せて、弟の長所を上手に挙げて評している。やはり素晴らしき兄ありてかつ弟ありと
いうことであろうか。

三

「題蕭子雲帖」は、具体的な書の古典研究と技術の上達法を論じた内容である。

蕭子雲(四八七〜五四九)は書の古典の善し悪しをあげるこ
とができなかつたので、その時代の評判に従って王獻之を手本
として書を学び何年かすごした。そして、二十六歳のときに『晉
史』を著し、王羲之と王獻之の列伝まで書き進み、草隸の法に
ついて論じようとしたが、十分に意を尽すことができず、ただ
飛白体の事を論じただけであつた。その後十年位たつて、勅旨
の論書、梁の武帝の「觀鍾繇書法十二意」を見るとその中で筆
法を論じていた。即ち、鍾繇、羲之、獻之の筆法の優劣を論じ、
字体を正しく理解されていた。そこではじめて蕭子雲は獻之の
書を学ぶのをやめて、鍾繇を手本として学ぶようになった。そ
のために自分でも技法が進歩したと最近になって思っている
という内容である。

梁の武帝の「觀鍾繇書法十二意」の内容の主なものは、魏の
鍾繇の書法を説いたもので、はじめに十二意、即ち、平(横)、

直(縦)、均(間)、密(際)、鋒(端)、力(体)、輕(屈)、決
(牽掣)、補(不足)、損(有余)、巧(布置)、稱(大小)をかか
げ、その後鍾繇の書が二王よりすぐれていることを論じてい
る。そして、二王は当時流行にのつていてもはやされてはい
たが、二王も本来は鍾繇を学んでいるのであつて、鍾繇の書こ
そより高く評価されなくてはならない旨を述べている。また、
獻之が羲之に及ばないのは、羲之が鍾繇に及ばないのと同じで
あり、鍾繇と羲之の間には言うに言われぬ差がある。また、獻
之の書を学ぶのは虎を画くようなものであり、鍾繇を学ぶのは
龍を画くようなものであると述べている。これは虎を画くより
龍を画く方が難しく、龍を画く方が高く評価されている。

以上のような内容を読み、影響を受けた蕭子雲は、獻之を先
きに学んでいて、鍾繇に変えたら技術が一段と向上したように
思うということは、一体どのようなことを意味しているのであ
ろうか。当時としては、世間的に人気のある獻之の書は自分の
気持に合致しなかつたのであろうか。獻之の変化のある鋭い線
の書よりも沈着冷静な鍾繇の書のほうが合っていたというので
あろうか。これがかもし、蕭子雲は獻之の書ではなくて、羲之の
書をはじめに学んでいたらどうなっていたであろうか。また、
どうしてはじめに獻之の書を学んだのであろうか。古典の善し
悪しがよくわからなかつたのであるならば、獻之をはじめに学

ぶということはおそらく問題の残るところである。それとも外見上、何か心引かれるものが獻之の書にあったのであろうか。いろいろと疑問点があげられる。

蕭子雲については、『宣和書譜』に、

字は景喬、晋陵の人、官は侍中に至る。正隸、行、草、小篆、飛白を善くし、而して正隸、飛白尤も工みなり。意趣飄然として驚拳の状あり。而して世に其の草字、正隸多し。初

め王獻之を学び、晩に鍾繇を学び、乃ち能く二家の妙を研む。梁の武帝、遂に以為えらく、二王以て迹を比す可しと。

とある。また、飛白にもすぐれていて、その壁書した蕭字が後の人の間に珍重され、壁そのものをはずして移動し楽しんでたという話が伝えられている。

さて、ここで問題になるのは、本題跋では「蕭子雲が獻之をはじめに学んで、その後鍾繇に変更したら、最近になって自分自身の腕前が進んでいるのがわかった。」ということであるが、『宣和書譜』では「初めに獻之の書を学び、後に鍾繇を学び、ついに二大家の妙処を会得した。」と述べられている。つまり、本題跋のほうは明らかに獻之の書よりも後に学んだ鍾繇の書のほうが腕をあげるのにはよいというようにとれる。即ち、獻之の書には会わない所があり、鍾繇のほうが性格的にもびつたりくるものがあつたのであろう。しかし、『宣和書譜』のほう

は「能研二家之妙」と、この二人の書家の妙処を会得したというのである。ということは、学ぶ先後の違いはあるが獻之も鍾繇も対等にとらえられているということである。どのような理由で本題跋は鍾繇の書のほうが蕭子雲によい結果を与えたかという問題は、梁の武帝が書いた『觀鍾繇書法十二意』を読み、鍾繇と獻之の筆法の優劣の理論を素直に理解し、そのまま実行したからであろうと思われる。

また、本題跋の後半に、衛夫人（二七二〜三四九）が一人の僧侶に与えた手紙が『淳化閣帖』にあるが、これは蕭子雲の文章をあちこちから取ってつなぎあわせたもので、それが偽作であることは疑う余地がないという内容である。その手紙とは

衛稽首和南。近奉勅寫急就章。遂不得與師書耳。但衛隨世所學、規摹鍾繇。遂歷多載、年廿著詩論。草隸通解、不敢上呈。衛有一弟子王逸少。甚能學衛眞書、咄咄逼人。筆勢洞精、字體遒媚。師可詣晉尚書館書耳。仰憑至鑒、大不可言。弟子李氏衛和南。

とある。具体的には右の文章中、「但衛隨世所學、」から「不敢上呈。」までと、「筆勢洞精、字體遒媚」などが蕭子雲の文章の部分をつなぎ合せたものと言われる。また、衛夫人については、宋の羊欣の『古來能書人名』には

晉中書院李充母衛夫人、善鍾法、王逸少之師

とある。名は鑠、字は茂猗、晋の廷尉であつた衛畏の女、同じく廷尉の衛展の妹、衛恆の従妹、汝陰太守の李矩の妻、王導の記室參軍の李充の母である。書は鍾繇の法を善くし、羲之に書法を伝えた。従つて羲之の師ということになる。

また、本題跋の十七番目に「題衛夫人書」があり、二十七番目にも同じように「跋衛夫人書」があるので、本稿の目的である二王に関してということとは違ふが、内容について参考まで引用しておく、まず、「題衛夫人書」には

衛夫人書、既不甚工。語意鄙俗、而云奉敕、敕字從力。館字從舍。皆流俗所為耳。

とある。王羲之の書の先生である衛夫人の書は、それほど上手ではない。文字の使い方も通俗的である。前述の『淳化閣帖』の僧侶に与えた手紙にもその一端が見られる。例えば「奉勅寫急就章」の「勅」は「敕」ではなく旁が「力」になり「勅」となっている。また、「館」は偏が「舍」になり「館」となっているところなどに見られ、みな通俗的な人が偽作したものではないという内容である。また、もう一方の本題跋の衛夫人に関するものは、

此書、近妄庸人、傳作衛夫人書耳。晋人風流、豈爾惡耶。

とある。即ち、この書とは、やはり前述の『淳化閣帖』巻五にあるものであるが、この書は近ごろでたらめな人間(妄庸人)

が、衛夫人の書と言ひふらしているだけである。晋代の人の風流さ(書の趣き)は、どうしてこのように俗悪であろうかという内容である。この両東坡題跋から見ても、衛夫人のこの書は特に評判が悪いようである。文字の使い方は俗人がやることをやり、センスが晋人好みではないという評は、羲之の師匠として少々問題があるのではないか。晋人である以上、二王に代表される特有な香りの高い芸術性に富んだ書が当然であるのに、何が理由で衛夫人の書についてここまで酷評するのであろうか。何か他に目的があるのであろうか。

また、蕭子雲の書については一つ前の「題蕭子雲帖」について詳しく触れたが、やはり本題跋の二十一番目に、

唐太宗評蕭子雲書云、行行如紆春蚓、字字若縮秋蛇。今觀其遺跡、信虛得名耳。

とある。これも唐太宗の蕭子雲の書に対する酷評である。と同時に、東坡自身も厳しいことを付け加えている。蕭子雲の『淳化閣帖』に載っている書に書きつけて、太宗の言を引用し、一行一行は元氣のない春のみみずをめぐらせたようであり、一字一字は元氣のない秋の蛇をつないでくねらせたようであるという評を頭において、実際に今彼の遺墨を観ると本当に太宗の言葉の通りであつて、実力がないのに名声を得たというべきであるという内容の跋である。このような厳しい評は、一体何を根

扱として言えるのであろうか。しかも天下の『淳化閣帖』に載っている書についてである。東坡はこのように言える資格があるのであろうか。時代が変わって見る目が変化したから言えるのであろうか。疑問の残るところである。

「跋褚薛臨帖」(褚・薛の臨する帖に跋す)は、褚遂良・薛稷が二王の書を臨書した帖に書いた東坡の跋文である。即ち

王會稽父子書存於世者、蓋一二數。唐人褚薛之流、硬黃臨放、亦足爲貴。

とある。「王會稽父子」とは二王のことである。この二王の書が世に伝存するものは恐らく一、二点であろう。それゆえに唐代の褚遂良や薛稷が硬黄紙に臨書したものであってもやはり貴重であるというのである。この硬黄紙とは紙を熱して黄蠟をぬり、透明にして墨跡を模写しやすくした紙である。また、二王の書が「蓋一二數」存するという言い方は、どのように解したらよいのであろうか。この世に一点か二点あるかもしれないという意味であらうか。本当に実在するのであろうか疑問である。従って硬黄紙に臨做されたものも貴重であるということは言える。多分本物を敷き写したのであろうから、字形はよく似ているであろうが、筆勢はどうしても本物とは違ってしまうのは止むを得ないことである。玉作と言われた蘭亭序は、昭陵に葬られてしまったが、蘭亭序に限らず二王の真跡はすべて葬られたと

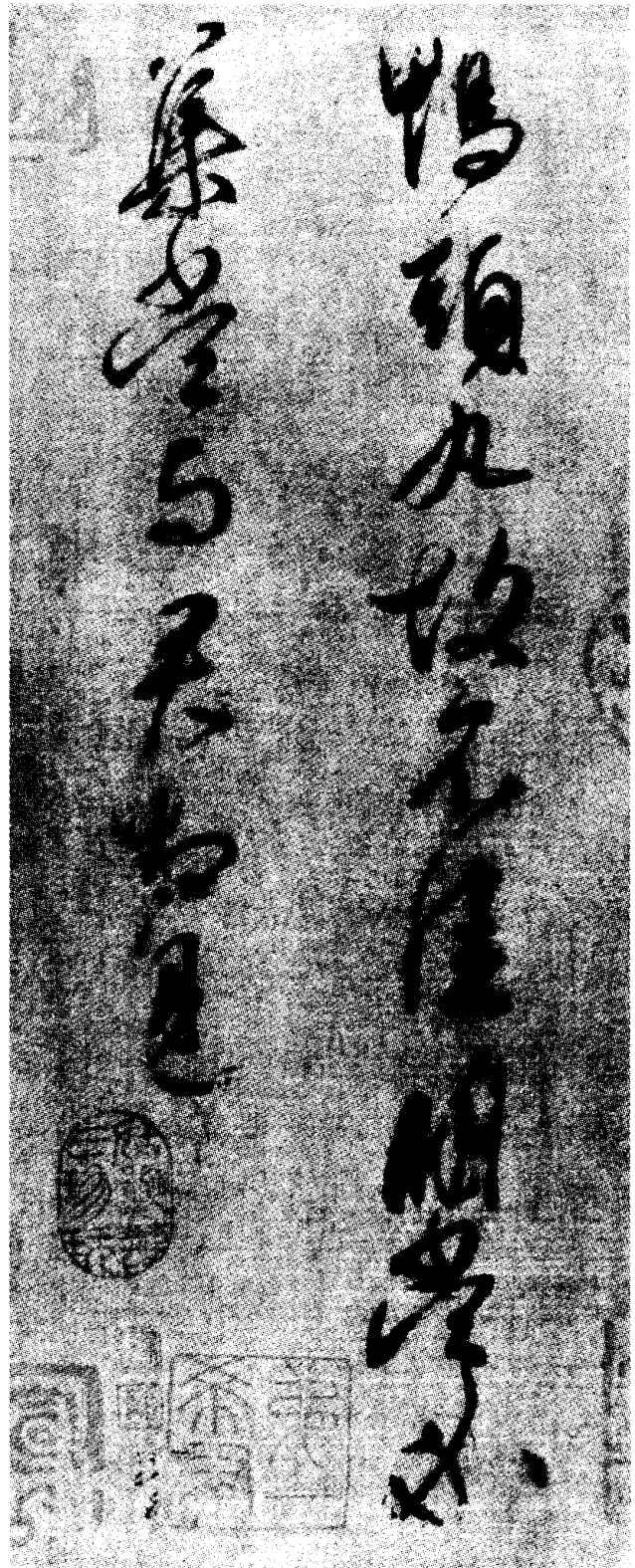
言われる。初唐までは本物は実在したのであろうが残念なことである。しかし、そのために臨摹してその書の雰囲気を何とか後世に伝えようという当時の書家たちの努力により、現代の書の世界も支えられているのである。臨摹について考えるために、獻之の「鴨頭丸帖」を一例として観察してみると、全文は

鴨頭丸故不佳。明當必集。當與君相見。

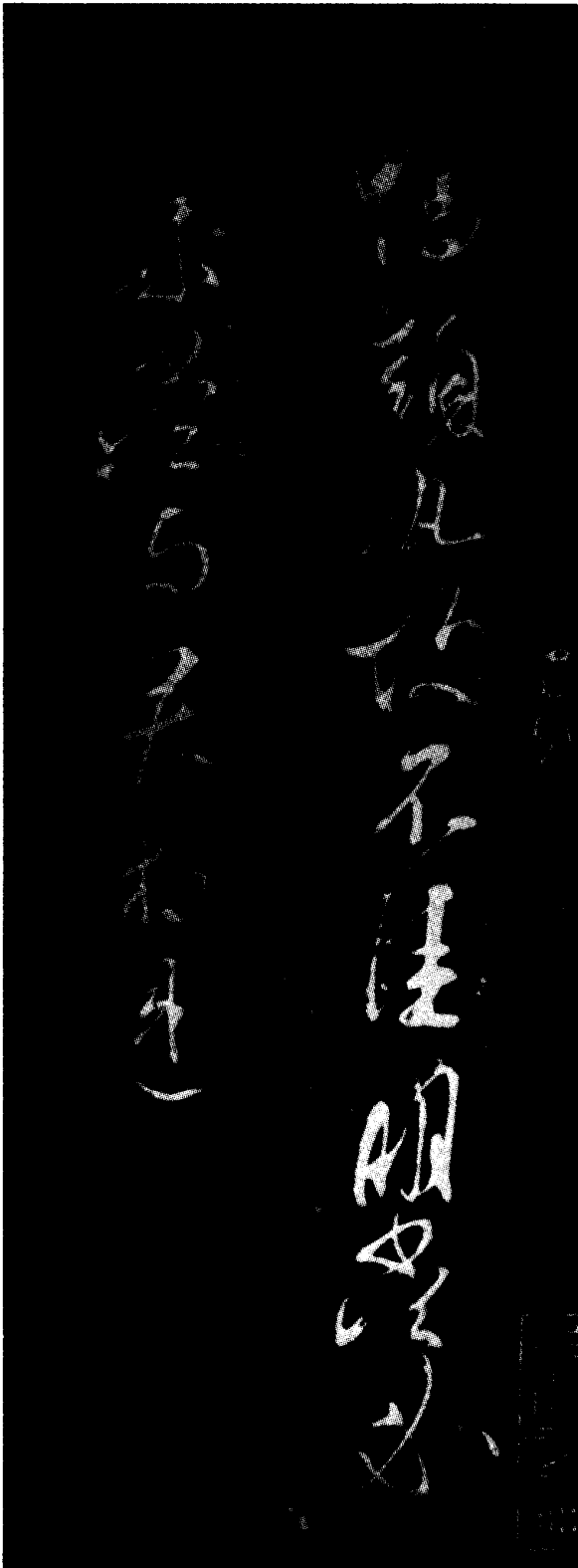
と、草書を主体とした十五字であるが、敢えて書体について考えてみれば、草書は「故・佳・當・必・當・與・君・相」であり、あとの「鴨・頭・丸・不・明・集・見」は行書と見ると、行草体としたほうがぴったりとする。

さて、次頁の「鴨頭丸帖」の写真(A)は、現在、上海博物館に收藏されているもので、絹本に墨書された臨摹本である。(B)はその臨摹本をもとにして刻されたもので『餘清齋帖』にある。この(A)(B)両者を比較すると酷似していることはよくわかる。これは刻法が当時いかに精巧であったかがうかがえる。そして、(A)のすぐ後に、

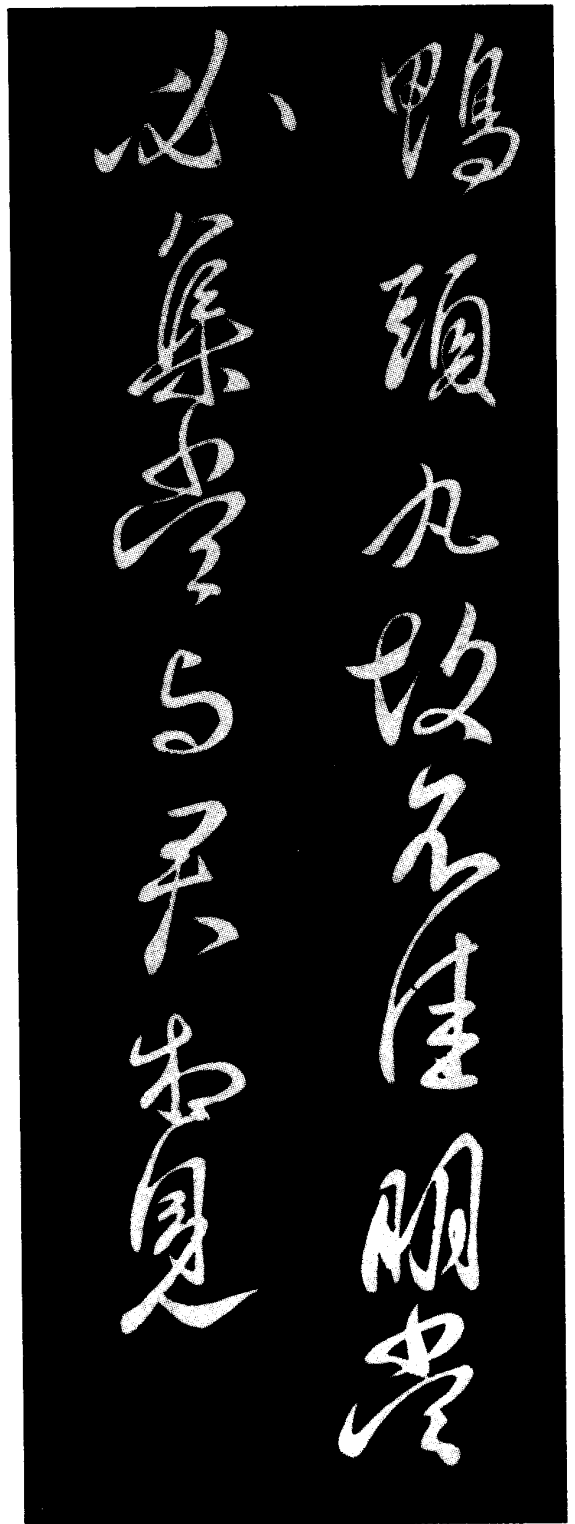
天曆三年正月十二日 勅賜柯九思侍書學士臣虞集奉勅記
と虞集の款記がある。天曆三年(一三三〇年)即ち元の文宗の時に柯九思に賜わったものである。また帖の左上に「天曆之寶」の大璽が押され、その下にこの款記が書かれている。また、帖後に高宗の紹興庚申歲(一一四〇年)に宋の高宗の贊がある。



臨摹本 (A)



餘清齋本 (B)



淳化閣帖 肅府本 (C)

大令摘華 竄絶今古 遺蹤展翫 龍蟠鳳翥 藏諸巾襲 冠

耀書府

また、この賛の後に、宋の元豊己未（一〇七九年）、柳充、杜昱の観款⁽⁸⁾が

河東柳充聖美京兆杜昱宜中同觀于安靜堂 元豊己未十月望

日

とある。そしてその後さらに明の王肯堂、董其昌などの跋がある。(A)は明の神宗の時に内府に入り神宗が自らこの書を熱愛したが、また禁中から出て呉廷のもとに入り、『餘清齋帖』に刻されたのが(B)である。

また、写真(C)は『淳化閣帖』卷十（初拓肅府本）にある。宋

の淳化三年（九九二年）、太宗が宮中にある古今の名筆千卷の中から翰林侍書の王著に命じて、名品を選定させ摹刻させたのが『淳化閣帖』であるが、この肅府本については藤原楚水「淳化閣帖釋文」内の解説によると、

肅府本は、一に蘭州本ともいふ。明の太祖の第十四子、肅莊王が蘭州に封ぜられたとき淳化閣帖の宋時の原石本の下賜をうけ、これをその家に藏してゐた。肅府本といふのはそれからの翻刻である。この法帖の刻を思ひたつた當時の王は肅憲王といひ、名は朱紳堯で、鈎摹刻石に當つたのが温如玉、

張應臺の二人。萬曆の末年から天啓元年にかけ前後七年をもつてこれを完成した。

とある。(A)と(B)は絹本とその刻本との関係で止むを得ない表現の違い、例えば筆勢、線の太細・潤渴などはあるが、(B)は(A)を直接もとにして刻したものであるから、それらを除いて酷似しているのは当然であるが、(C)は線質も大分異なっている様子がよくわかる。二行目のはじめに「必」が一字下から送られている。一行目のはじめの「鴨頭丸」、二行目の「集當」の細い線などはほとんど見られないが、筆路及び筆の動き、字形はよく似ている。(C)は全体的におおらかであり緊張感はないが、淳化閣帖によつても諸本それぞれ違いがあるのは当然である。しかし、この(A)・(B)・(C)の三本を比較してみると、やはり何と言つても(A)が素晴らしい顔をしていて、書としての真实性が感じられる。これが摹本なのだと思うと次の瞬間によくもこんなに流麗に、技術的に潤渴などを生かして書いたものだと思う。しかし、厳しく見れば、はじめの「鴨」の「甲」、「頭」の「頁」の線にはもつと張りがあつてもよいのではないかと感じ、また「明」の「日」の一面目の縦画などはもつと張りがあつて充実した線であるべきだと思う。その点は、(B)は鋭く刻してあるために、線に張りが感じられる。(B)は渴筆を出すのに刻法を苦労しているのがわかる。例えば、「故」の旁、「當」の五画目、「集」の下

の「木」の長い横画などである。全体的に(B)は線が細めで鋭い感じがして、スピード感があるが、一行目の三字目の「丸」の二画目と、五字目の「不」からの連綿の線が極端に細く刻されている。その点、(C)は線にたつぷりと肉が付いて、ゆつたりとして堂々とした全体の雰囲気は、(A)・(B)とは大分違っている。後世になつて集帖に刻し編集すると、これほどまでに変わってしまうのかと、少々狼狽きみである。筆路に関してはほとんど変わっていないが、線質が違いすぎる。(B)と(C)などは別の書のように見える。

さて、この三枚の写真によつて、臨摹と集帖の摹刻との違いを見てきたが、多分、実際に書かれた本物の原本とは大いに違うのであろう。しかし、前述したようにその影で苦労し、伝えのこそうという努力をしている人物のことは歴史には出現しないが忘れてはならないことである。なお、清の楊守敬が、門人の水野疎梅に書き与えた学書入門書である『學書邇言』に於ける、「鴨頭丸帖」については

餘清齋跋、有宋高宗贊。清超絕塵、閣帖已刻之、重濁不堪矣。觀此足知董香光深不滿閣帖、有此實證、非故爲軒輊也。とある。

四

「辨法帖」は、書を弁別すること、即ち、書の真偽を判定することの難しさからはじまっている。書を弁別することの難しさは、丁度、医者が病人の声を聴いたり、脈をとったりして診察し、何の病気を判断するようなものであるという。どの点に困難さがあるかという、書の良き、悪きは判定できたとしても、それが本物か偽物かを判断することは特に難しいことである。そしてそれを自分だけがやろうとして、無理を構わずに名称と実際とを一致させ、即ち「名を正す」と失敗するというのである。例えば、『淳化閣帖』十巻の中には、本物の中に偽物が多く、羲之が書いたと言われる巻六の「行成帖」は、張説（六六九〜七三〇）の文であり、巻七の「承足下帖」も羲之の部の中にあるのは誤りであると、東坡は述べている。

まず、一般的に言われる「行成帖」であるが、『淳化閣帖』では巻六に「行成帖」としては掲載されていない。「行成」の前には一行分「今遣郷里人往口具也」が入っている。（具字は別本では「言」に作っている）従って「行成帖」ではなくて「遣郷里人往帖」と呼称されている。一般的には「行成帖」と呼ばれるという説もあるが、『淳化閣帖』（肅府本）で見る限りでは、「今遣郷里人往口具也」と、次の行以後の「行成旅以従是月也。云云」

【東坡題跋】巻四に於ける二王の存在に関する考察（中）（塚本）

とは一連の流れがあり、この間で切断されているとは思えない。しかし、あくまでも『淳化閣帖』は集帖であるから、内容に係なく続けて刻してあるという見方もある。また、尺牘の意味の上では、切れると断定して読めば読めるし、次の「行成旅以従」と切らないで続けて意味を考えれば考えられないことはないが、続けて一連のものとするれば「行成帖」の名称はあり得ない。「淳化閣帖釋文」（藤原楚水校註）では、続けて釈文を著して「遣郷里人往帖」の中に「行成旅以従云云」を含めている。また、「王羲之全書翰」（森野繁夫・佐藤利行共著）では、「今遣郷里人往口具也。」と一行を独立させて、「遣郷里人往帖」としている。また、東坡は本題跋をとり上げるのに「逸少部中、有出宿餞行一帖」と称している。後半部分に「出宿餞行」の四字はあがあるが、どうして敢えてこのような言い方をしたのであるうか。書の上で線質が充実して東坡の眼に写ったのであろうか。それとも、この四字句の意味内容に心引かれるものがあつたのであろうか。東坡に言わせれば「行成帖」よりも「出宿餞行帖」のほうがよかつたのであろうか。また、前述のように、「行成帖」は張説の文としているが、実際はこれは間違いで、『張説之文集』巻四に「餞張尚書赴朔方序」とあり、張説が朔方へ赴くのを送った文を賈曾が書いたということに解されているが、これは後の再調査すべき問題である。なお、前述の「今遣郷里人往口具也。」

と「具」であるが、「淳化閣帖」(肅府本)を細見すると、「言」に読める。肅府本は「言」に解しているが、積文は「具」にして「具字別本作言字」と注している。「口具」と熟語に読んで、「口頭」の意(「王羲之全書翰」に解している。「口具」よりも「口言」のほうが言葉の上で自然であり、草書体の略し方が「具」ではなく、「言」である。

次に、「承足下帖」であるが「承足下還來帖」とも呼ばれる。これは明らかに偽物であるという証拠に、この尺牘の最後に「不具、釋智永白」があるから、羲之の部の中に入れてるのはどうかつな謬り、即ち「疎謬」としている。現に肅府本を見ると、書そのものは少々力みすぎていて、前後の雰囲気と異なって見える。一行目の一字目の「承」、四字目の「還」、二行目の四字目の「慰」、三行目の「往問」、四行目の二字目の「深」、五行目の一番下の「展」などは、特大である。羲之がこのような書き方をするのであろうか。疑問の残る所である。そして、力強くて大きくて迫力はあるが、上品さが見られない。エネルギー的な全体の雰囲気は伝わってくるが、全体のまとまりにも欠けているようである。また、最後は「智永」で終わっていて、「白」は入っていない。本題跋では「白」を入れ、「もうす」と読ませている。もちろん積文にも「白」は入っていない。そして、積文には最後に次のような注がある。

米元章云、此帖世多論爲差誤。秦少游云、當時奉詔集帖之人苟於書成、不復更加研考。故以智永爲右軍書耳。大觀帖次智永帖下。

と、この「承足下帖」が謬りであることは、米元章も認める所である。また、「承足下帖」という呼び方は、「淳化閣帖」には見られない。前述の「淳化閣帖釋文」は、一つ前の「昨見君歡帖」の続きとして入っている。いかにも後から押し込んで入れたように見える。もちろん意味のつながりはない。どうしてこの場所に入ってしまったのかは不明である。東坡は「不具釋智永白」と「承足下帖」のことを言っているが、これはやはり一つの特徴をとらえた言い方をしているということであろうか。

さらに、本題跋は、獻之の「鷺羣一帖」が、獻之の真筆ということで後半に入っている。これは『淳化閣帖』巻十の最後にある。これは東坡が以前に首都汴京¹³で直史館に勤めていたので、朝廷の秘府に收藏されている書籍や書画を見る機会があつて、直接に真筆とは言つても、硬黄紙に臨書したのを見たときれている。時に東坡が三十歳か三十一歳の頃であつた。東坡がこの獻之の一本を「鷺羣一帖」と呼ぶのはよくわかる。それは「鷺羣」が目立ち、特に「鷺」の一字は印象的である。いかにも獻之らしい、傍若無人な、父の羲之をも呑み込んでしまふような氣宇壮大な書である。そして、その後また駙馬都尉の宋の李璋

の家で、謝尚や王衍の書を見て、その気品の高さに感激している。押印は唐の王涯の印があり、その家蔵本であつたとされている。そのほかの本は唐代の人が臨書したもので、みな大切に所蔵するにふさわしいものであつたと本題跋をまとめている。なお、本題跋は前述の「題晉人帖」と重複している部分がある。

さて、本稿は『東坡題跋』巻四に於ける二王の存在に関する考察(中)と題して論を進めてきたが、二王に関係がある二十六題のうち六題についてのみ考察を試みた。まだ意を尽せぬことは多くあり、諸般の事情によりあとの十数題に関しては次年に持ち越しとなり甚だ無念ではあるが止むを得ないことである。はじめの「題遺教経」は、欧陽脩が「遺教経」は羲之の筆蹟ではないという自信に満ちた言葉の引用からはじまった。本物か偽物かということは確かに重要であるが、羲之がまだ生きていた時からそっくりの書があり、羲之自身も気づかないということがあつた。しかし、この「遺教経」がたとえ羲之が書いたものでないとしても、その書がすぐれていれば学ぶべき手本としてよいのではないかというのが東坡の考えである。次の「題二王書」は、羲之と獻之、張芝と索靖を使って論理的にうまく表現している。故事と共に総合理解すべき内容であるが、当然その比較の対称となるのは東坡自身であろう。これは一般論とい

う解釈もあろうが、東坡本人のほうが内容が具体的になる。しかし、羲之に及ばなければせいぜい獻之くらい、張芝に及ばなければせいぜい索靖くらいという言い方は、東坡と獻之、東坡と索靖という比較が生まれ、このように具体的な人物の書と自分自身の書とを比較する東坡の心理は一体どんなものだったのであろうか。次の「題晉人帖」は、二王の書が太宗皇帝によって守られ、昭陵に葬られたが、残念ながら盗掘に会い、金や玉は尊重されたが肝腎な書は全く不明であるということは、無惨にも捨てられたのであろう。そのような中で東坡は以前に宋の李瑋の所で謝尚や謝鯤、王衍などの晋人の書を見たが、特に王衍の作品は東坡の心を打つたようである。群鶴が今まさに飛び立とうとして、まだ飛び立っていないかのような感じと、東坡の詩人らしい表現でまとめられている。また、次の「題蕭子雲帖」は、蕭子雲の古典研究と書法の技術向上について述べられている。はじめは人気があつて優秀な獻之の書を模範として学び身につけたが、勅旨の論書である「觀鍾繇書法十二意」を読むと彼の書道観が変わり、今度は鍾繇を範として学ぶようになったら、技法が進歩したというのである。具体的な内容で興味深いのが、蕭子雲にとって一体何が最も変わったのであろうか。技法の向上という手先きだけのことであろうか。また、衛夫人が一人の僧侶に与えた手紙は、蕭子雲の文章から取ってつなぎ

あわせたということで、これは「淳化閣帖」にあるが明らかに偽作であるということが付言されている。「跋褚薛臨帖」は、褚遂良と薛稷が羲之、獻之の書を臨書した帖にこの跋文を書いた。短かい文章であるが、前半の「父子書存於世者、蓋一二數」は、東坡の時代では「蓋一二數」と言われていたのであろうか。現存する作品は一、二点あったということは本当だったのであろうか。皆無だったのではなかったのかということが問題になる。従って褚遂良や薛稷が硬黄紙に臨摹したものも貴重であると東坡は述べている。そして、最後の「辨法帖」は、「淳化閣帖」所収の法帖の真偽について述べている。「淳化閣帖」の中には意外に偽物がある。前述の衛夫人もその例であるが、「行成帖」と称する張説の文、また「承足下帖」と称すスケールの大きい智永の文など、羲之の部の中に入っていて偽物、しかし、獻之の「驚羣」の一帖は真筆であろうという東坡の鑑識眼である。要するに書の真偽を判定することは、名称を一致させたりして綿密にやろうとすると必ず失敗するし、難しいことだということである。

者の方々の書籍を参考にし、引用させて頂きました。ここに記して慎しんで感謝の気持を表したいと思います。

以上、本稿は六題跋についてしか扱えなかったが、内容は充実していて手答えはあった。ここに「中巻」と称し、以後続篇としてまとめていきたい。

なお、最後になりましたが、本稿をまとめるに当り、次の著

- 【中國書論大系】(第四卷) 東坡題跋卷四 杉村邦彦譯 二玄社
- 【中國書論大系】(第一卷) 四體書勢 上田早苗譯 二玄社
- 【中國書論大系】(第一卷) 古來能書人名 吉田教專・神谷順治譯 二玄社
- 【中國書論大系】(第一卷) 論書表 杉村邦彦譯 二玄社
- 【中國書論大系】(第一卷) 論書 吉田教專・神谷順治譯 二玄社
- 【中國書論大系】(第一卷) 觀鍾繇書法十二意 中田勇次郎譯 二玄社
- 【中國書論大系】(第五・六卷) 宣和書譜 日原利國譯 二玄社
- 【東坡題跋】(書芸篇) 高畑常信訳 木耳社
- 【淳化閣帖】(初拓肅府本) 藤原楚水校註 清雅堂
- 【淳化閣帖釋文】 藤原楚水校註 清雅堂
- 【中國書道史】 藤原楚水著 三省堂

『書道金石學』

藤原楚水著

三省堂

『王羲之全書翰』 森野繁夫・佐藤利行著

白帝社刊

『晉書』

中華書局

『晉書』(和刻本正史)

汲古書院

『世説新語』

目加田誠著

明治書院

『世説新語』

竹田 晃訳

学習研究社

『學書邇言』

二玄社

『書道藝術』(第一卷) 王羲之 王獻之

中央公論社

『書道研究』(蘇東坡の人と書)

萱原書房

注

(1) 『東坡題跋』 4 題遺教經所収 「精隱であれば」の解釈について 高畑常信訳

(2) 『中國書論大系』第四卷所収 「遺教經の注27」 杉村邦彦訳注

(3) 『東坡題跋』 4 題遺教經所収 「小人」を「王獻之」に解している説

(4)・(5) 『中國書論大系』第四卷注所収 杉村邦彦訳注

(6) 『書道藝術』第一卷所収 絹本 26.1×26.9センチ 上海博物館所蔵

(7)・(8) 同右

(9) 「具」は『淳化閣帖』肅府本を見る限りでは、「言」の草書体である。「具」ではない。熟語として考えた場合も「口具」よりも「口

言」である。

(10) (11) (12) 4と同じ

(13) 汴京 拙稿『東坡題跋』巻四に於ける二王の存在に関する考察 (上) 和洋女子大学紀要・第32集所収

(本学助教授)